004416-000-0

特64-626

古今侠客英名水滸伝

伊藤　倉三／編

M20

ACE-0913

特64
626

使客

明治二十年五月五日内務卿伯爵

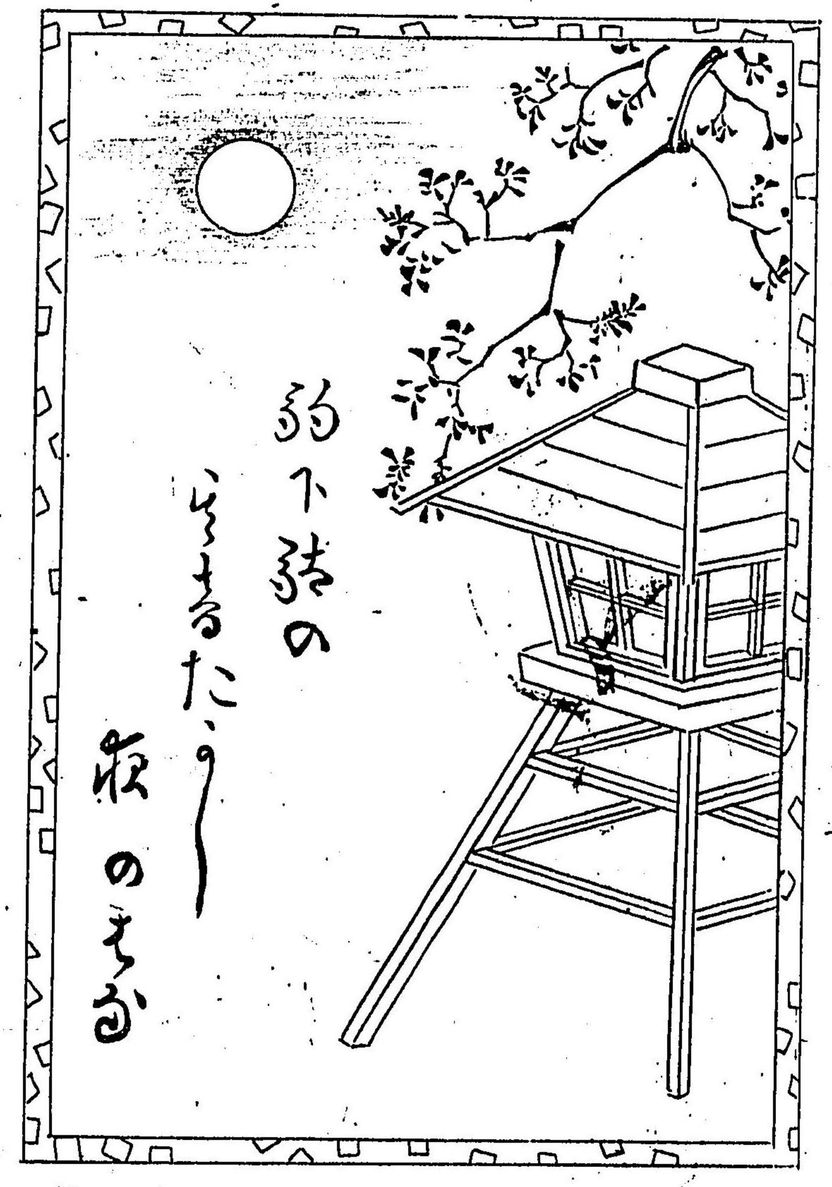
古語に曰く英雄とは為さるい勇ある死也と以て使客と
唱る去様ゝとして眞の英雄に〳〵その年に懶惰怠慢去る博
の官たる者の世性義気豪く〳〵君子の
為時を活使客と唱ふ〳〵も世に業虎狼の如く
為を仕拙利に耽り戦を貪る徒のみ也と以て顕す
使客八善不善を論せ代名の裏きを験し終ぬ

明治十八年
月

桜岳記

極印千左門
いき
伊左ゑ
そろひや
廓の法
厂金文七
雷庄九郎
巻中出像 櫻齋
房種筆

安野平兵工
布袋市右工門



弱下駄の
いくまるたう
夜のもの

不破伴左エ門
此人種々作りて其事
蹟定りなら
ばこまそその
頃狭客
の浪人
なるべし
名古屋
山三と鞘。

二本枕を抜く其よりところを
まらば。

。当の夜又上野

。作り物
語あるひら
浄るりあや
つりあと
より
出る
ものみや

名古屋山三郎

比人事蹟も極めて定るらに但し

名古屋三左衛門といふもの室町家の臣なるが出雲のお国といふ女哥舞伎と共ちに哥舞伎狂言を始めしよし

合古記書に見へさりとも山三郎が子なりとぞいふ。

敵討のことあるに其實詳らかならず

幡随院長兵工

江戸俠客随一

ゆへて強記を挫き弱き記扶け其義氣盛なれば人親分と称し一属者ぐ俠客多し其名四方に暉記し

8 寺西閑心の苦肉の計ぞ悩り竟に命をおとし名を口碑に

呼ばむ人傑なり

8

寺西閑心
世ふ白柄組の俠客と
称し其徒多し
然れども
その人物
利を
見てハ
義を忘れ
ひたすら我
意ふ募りやもすれば
喧嘩口論を昔とし后
長兵工を邪計ふ
入をいれ
その名を汚す

黒船忠右工門
此人船乗を業と
し其船黒塗なる
をもて黒船
忠右工門
と名乗て其罪を訴ふ去らるふ獄
門ゑ遺言とその剛氣
を。
性強
氣也て
仁者の風あり
子分五郎八ゑ事ふ付て
獄門庄兵工を討自ら
遠流ふ所せ
られ
憐を
命を

團七
泉州堺の町人なり
ゆへありて。

一寸。
徳兵
エが妹をなに
づる此男
九郎兵エ不敵の悪者ゆへ
沽んと團七夫婦を詐るゆへ困て團七徳兵エへ言訳る〳〵

竟ゆへ
男を
殺し
ぬ

白井權八
中國路の産ゆへ
剱術の早業ゆへ
江戸へ達し故ありて
妹播磨
長兵エが方へ
隨院
舎藏る郭へ入りて
小紫と深くちぎり金ゆ岡て悪事をなし因て才を隠し或へ梵論と
る竟ゆ天の網ゆ
今比。
才を果に
異塚
その址なり

唐犬權兵衛

播磨の国院長兵衛が子にして一個の侠客也

ある時唐犬が病つ犯人を噬つ犯難義の折柄權兵衛ことをるんるふと殺し害を除く因て唐犬となる名せり額を鍬の如く。

唐犬額とゝふ

朝日奈藤兵衛

勇猛抜羣にして誰も是に敵する事叶はず故に朝日奈の呉名を付て

※力と争ふ事を恐る時に喧嘩屋五郎兵衛其高名をそゝ言を設て

勝事能はざるゝ

候ふ〳〵傳七
茶船乘の若者みて
男を磨くるあるとき喧嘩屋
五郎兵エと行
合しとり
彼の傳七
ゞ足と
踏ならべ
無謀の
奴なると其まゝ⊗

⊗行過るを
五郎兵エ持病と發し彼方
より仕かければ傳七止事と
市中と
騒が
しき

浪花
喧嘩屋五郎兵エ
天滿
市の川
住て只管
無謀の喧嘩
をなして人を打倒
夫と狀とる曲者之田

田一時傳七ゞ足とふゝ却て
彼との去り竟ハ
喧嘩とる
茶船⊗
⊗五郎右エ門
制さるとる
きゝて依て傳七の
爲ふらためふ逢しとる

8人の害を除く
時路ふおいて老
波之逢ふこと古狐の
化るこその愁訴を聞て
あつまることが願を果さむ其
報謝として白狐玉をあくりる

白雨勘兵工
難波の俠客なり仁義組と
称へ不當の事をとるべ
諸人と隣こ誠と
尽さ8

達磨半九郎
中の嶋小山太郎兵工が
子分ふて男を磨く
者なり

新
地の
云妓女ふ
馴染て正月
初買の日相客と
物争出来て騒動ふ

及ぐんとまろると仲人の扱ふて
事穏ふまませしらべ
こゝ3人合
其男気
を誉げる
とろり

放駒四郎兵工
幡随院長兵工ゲ
子分ホて其頃名
高き俠客ハ
クの權ムるど
伴ひて郭
中ホ遊
ぶ然ま
ども長兵
工ゲ風を守り曾て無
法の事をせど狼籍を

◉働く徒あるべ才と
惜まぢことを〈

〈支えて
人の難義をも
くひーうぶ拳て
ことを敬ひ
けるとぞ

一寸徳兵工
妹を團七ホ
あづけホ
クの九
郎兵
工ゲ
所爲
といちらば
身賣のことを聞出し
大ボホ怒りて團七と勝
負を爭ふ其折鈎船三武

⊕こゝホ駈来り白刃を潛り割て
入り〳〵と宥めて浪花ホちも
むゝ竟ホ妹をとり
くゝ8

⊕傳ホ記き
殺せ〜ハ其
8團七男を

半晌黒兵工
剛勢ふして柔術
相撲とよくまて
てふ飜蝶丸
綱五郎といふも
の角力とよくとり
あるとて立合綱
五郎ふ負を
とりくを
恥辱
ふありひらまを。

亡りのふせんと
巧やどるもことなるゞ
事をりつけ喧嘩を仕る。

竟ふ
双傷ふ
及びー
とるり

鈎船の三武8女の叫ぶ声を聞て佐けゝ小團七の妻ろり容子と
難波の産ゝして
俠客の頭と称へらるゝ竟ゝ一度も不覚をとらぬ六十余歳ゝして只管後世を願ひる今宮新家の傍の小川ゝて8
きと直ゝ團七方へ送り届けゝ也

腕の喜三郎此入鬥勇ゝて美氣逞く一時止事を得ぬして闘争ゝ及び一ゲ其腕を切まとり日頃へて疵ハいえさまど其愈口見苦ろ
まぶ子分ゝいひ付て再び切直ゝ顔色動せぬ

東金茂右エ門

上総の国東金の産ふして豪邁の氣象なり故ふ近郷にきこえを称へ〳〵親分と呼ぶ其下風ふくるもの自ら多し筑波ことを

きく子分を連来りその義気をうんぜり

筑波茂右エ門

常州筑波の麓ふ住するふ依てく唱へうり此人生ざち温順ふして義気遅き〳〵弱きを扶け強きを挫く風あるふ

○至りをひふ義烈〳〵好音感ぜといり

よりて人ことを敬ひ哥こと称へあのづから其名高〳〵東金とその間ひ近く且同名るを以てくとへひたて相見せんと子分を随ゞて。

○野晒語助

此人俠客の一人ふして武勇剛勢を好み名其志し殊勝ふして禅家の法ふ皈し一休禅師と昊ふ呼こを遊暦し談義説法の席へ出る衣類ふ野晒を深し故ふ○

○昊名とせりこを悟道を○

□表せしものふや

夢の市郎兵衛

往古より俠客と唱ふるもの多しさまざまこの我意を逞しく或ハ喧嘩口論を好み非を以て理ふ勝こで其威を示すを以て快とし此人性簾直ふして敢て×

×非道とせ電光石火

□の世を感じ世間萬事夢のごとし

とて夢の字と冠とせり

鈎鐘太兵工

難波の産ふして俠客の立ものと

いへり

其元雷の如く或ハ鐘のゐぐきふくるゝ

りて鈎ゞと呼名せり。

或時馬士と大家の家士と喧嘩ありしを駈付て鎮めるその戈

中凡智ありぼと入と感じゞる

梅の由兵工

一時の俠客ふして其名四方ふ聞ゆ長吉殺しといふとハ雑劇ふ出て其証定

但しこの人堪忍を よく守りて常不口荒して。

ものとよく堪忍せべ危記事なり

君子の風ありとふべし貳その名後世までも輿うせる

堪忍のるる堪忍ハ淫もまる成ぬ堪忍まるる堪忍とも

法華長兵工◎とらーっど。

俠客の一人ゐーて其名遠近ゐ凄う

しる年老て佛門ゐ志し就中法

華宗ゐ帰依して来世をねがゝ

故吳名とせり或時一

人の賊有忍び入り

るとゝ珠数を凡

操り看經をまるゝら賊を◎ゆるる

ゐ放ち

慈悲

愛憐の心を起し

その

ゐ

茶船五郎兵工

難波東堀茶船

の船頭なり

血気剛

勢穴ゐ

秀て

是ゐ組

するもの多し

子分をいつくし

男をこがゝ喧嘩屋

五郎兵工と候べく◎

◎傳七が出入の中を鎮め三十石

を名め英名を。

。あらゝ

せり

笹川繁蔵

播州の産ゐして幼きより下総ゐ来り人と也遂ゐ俠客の長となり天保十四年夏助五郎を討んと切込しより飯岡の子分らをんゐりひ

繁蔵下※

※総上田原をよぎりしより助五郎方の者数ごゐ俠錦ゐて つゐ出す。

。を少も恐れ却て子分らを脅す。

白滝与吉

其昔銚子高野芝白滝村の産なり心強勇ゐして殺る伊達穴のつゐ紀合をは苗吉とゐふもの助五郎が子分ゐ恥辱を与へらるーを与吉見る彼の者を蹴倒し。

。苗吉が恥辱を雪ーらが苗吉其義氣を感ド飯岡より笹川へ夜打の奇蜜を知せる

野狐三次

上総国の法印なり
しが遠彦
道を好み
野狐を遣
ひて目
ぐを走る
因て負る稀
なりさまざまの法度を犯せ
罪みより所もちひみなり下総へ
8
来り助五郎が子分となり
屡ぐ人の眼をくらまし
勝をとりし史
8
睹もの
ホ狐の異名を付しをこの
三次より初りとす

助五郎妾縫

其ありさま。

嬋娟として
王を欺く
顔ぜ也
心猛ぐ
笹川より
夜討の節
夫が揖とるり竹鎗を携へ
繁藏が子分を喰逼

古坂額
巴御
前ホ
ホ考
ら
ぐ
とるり

荒尾留吉
指權次が
元長子分
道ふみて遠慮
妙手を得
一夜風窓
半次と
勝負の事ふ付
口論を引出し松岸
小船の田甫ふて両子切合ヒ二時
間ばかり折節助
五郎来掛りて
両人の中裁を
入れ説所
順なり
ひ竟ふ
飯岡の
子分となり
〜とぞ

閻魔
玄招
元上州
勝願
寺の
役僧
ろう生質大剛ふして大酒賭ものとこのて
竟ふ退院して后岩久保の賊
を退け住家とせしと鬼熊と
住家を取へせしとなり
賊
奪ひし
ふ忠次が
子分となり加勢
と頼こ
尚又

風窓半次

其産小舟木ふして風窓治郎右ヱ門と呼ぶ柔術者の門ふ入熟練して印可をえしゝを人呼て風窓の半次名せり助五郎繁藏と云へ無二の友なり飯岡へ夜打の時危うしと。

笹川ゝの子分の内二両人の首を切つて飯岡方の勇気を付しと。

平田三木

元奥州の浪人ふして弓馬劍術ふ達し惜べし其性女色ふ溺し古郷を食つゝ常陸ふさゝゆ よひし時麻嶌町なる撃劍。

大乱となり門弟五十余人を相手とし力戦して高嶋高嶋剛太夫と口論ふ及び竟ふ討果すと。

猿の傳次

本姓へ姉ケ寄傳次郎と号し筋目正しき者なり

遠戚道を

清滝左吉が子分と好き

なり飯岡喧嘩

◎咤の時左吉の助力として其働

猿の傳次と呉名せり

驚き故

※猿猴の如く其早業

諸人の目を

勢力冨三郎

下総の國干形の領万歳村の産ふして

生付力量抗

ふ越へ千斤

を重とせば

能相撲を取り

繁蔵の子分なり繁蔵

飯岡が毒手ふくりしより

親分の仇

※を討んと飯岡

ふ踏込みしと多

勢ふ囲を術尽て

自ら鉄炮を逆

手ふ以胸板をう

ち死失

也

洲の嵜政吉

房州洲の崎政右エ門が一子なり生質農を嫌ひ武藝を好み幼年漁船岩間ふなり動らぐ政吉この体を見て諸肌ぬぎて漁師四五人乗るまで引抜き

エイヤッ

いつて十町ヨ陸地へ引上げる斯る怪力

なることなり度其のち古郷を出て遠国道ホ入助五郎一の子分と呼ばるる

飯岡助五郎

其初銚子の五郎蔵が子分なりしが日を経て数万の子分を随ぐ遠近ホ隠れなる伊達冗の大統領となり家盛大なると言葉ホ尽し

岩瀬の繁蔵と諏訪の角力のエより呉越となり屢と白刃を交へと数度其際危を逃れ毒七順ホ近くして結布の上にて

亡命を賓ホ拉らし元侠客なり

神前馬於花

下総國笹川の

俠客

神前

馬

仁藏が娘お花ハ父の豪傑を見習

其形ち桃花の粧ひとゝゝ雄〻〻

常小尺八をさゝゝ往来を折柄さる者女と

梅り戯むまゝゝゝゝゝゝゝゝ

一笛ふていゝゝゝゝゝゝゝゝ

を見人称賛

藤井

数馬

或矢の藩藤

井源太左エ門といふ者

の男〻容顔美

麗ゝゝて殿の寵

愛殊小御寝夜の

伽もつる然りとゝゝゝゝゝゝゝゝ

似ゝ大酒賭物小更り或夜仕合あゝゝ殿の

秘藏の関の孫六の作物を盗ミ古里を退ゝ

國定忠次ゲ子分とゝり今ゝ牛若と呉名を取り俠客ゝり

國定忠次
上野國高崎玉定村の
産ふして幼より想明令
利ふして
鈍
鎗ふ
達し
生質
義ふ因て金
銀を塵芥ふ比し一命を鵞毛よりも軽んず家富んで
数百の子分有強きを挫き弱きを扶け鰥寡孤獨を
8憐み多く人望を得し
真の豪傑といへべし

因果六三　×一日子分の顔の揃ぬ
元来　十藏牛松の見へざるゆへ
上及
魚賣
の幹るり
其性商ひを
嫌ひ太刀を
好み真影流
の印可を
極め後遠
疾道を好み
忠次
の子分となり
忠次を愛ス×
◎六三真
影流の奥義ふ切やみ好
◎因果ふ命ぜし
故六三そそこと
尋ね内
土浦を過
時目明ら
突然と鍵縄
を以て六三
を捕へ
たり◎

名垂權平
其初狂井沢ホ
威を振ふ鳴神
音右エ門が子
分ホて
遠疾
道ホう
ひとをや
つくる或ひと
仕合あゝ旅人を
おびやかさんとして國定ホ。

◎いふ國定さらば
鳴神が首と持參せよと
いふ權平。
二言といはば鳴神が
首と土産とする再び
忠次が子分と
なりける

忠次の子分ホ
ねらんと◎

◎大入道出て小八が頭上をねぶらんと
す小八少しも驚かず煙草の
けむりを吹ほらば其
俄消うせる
是古狸へ

大佛小八
相州三浦の産なり生質
大膽不敵ホて世ホ恐る
者なく住居定らず或時荒
寺へ一宿なせしが小夜更るころ◎

釈迦十蔵
上州高崎の産ゝして
酒屋の男るり生付賭を
好こ義ゝ強くして忠次の
腕と頼こ一子分
也一日水戸
明神社ゝて

大土場の折切嶋軍次の子分らと
大喧嘩となり十蔵一人ゝて
十余人ゝ敵せり。
人間とハ見へざりる

七熊の市
下総の國舟橋在
七熊村の産ゝ賭もの
と好こ侠客のつゝ合を
るを舟橋宿の俠人藤蔓大助とゝふ者。

貧者の物を盗こ
と計果ゝ
其后明治の初め上総の浦ゝて
目明ゝと
喧嘩と
竹鎗
の先一命を落や
惜へを侠客
る頃

明治十九年十二月三日御届
同　二十年五月出版

編輯兼出版人　東京府平民　伊藤倉三
東京日本橋区蛎殻町三丁目十一番地

發兌元　金盛堂
同所

定価壱拾銭
結冷侠石伝　許専

俠客云々不注付

使
答